

# 痩せたサルと太ったサル

井口昭久

日本人の寿命は毎年延びてきた。どこの国でも寿命は延びている。世界中が羨しわの国に向かっている。80歳を過ぎた人の中には、「私は死なないのではないかしら？」と錯覚する人も出てきた。

しかし「人には何故寿命があるか？」という命題が科学的に解明された結果ではないので、「寿命には限りがある」という原則は不変である。

人の寿命は環境と遺伝子と生活習慣の影響によって延びたり縮んだりする。遺伝子に恵まれ、環境がよくて、生活習慣の良い人は120歳頃までは生きる可能性がある。

証する遺伝子はない。逆に「あなたの人生はこれまでだよ」という生命のスイッチを切る遺伝子も発見されていない。

現状では、寿命をのばすのにできることは、生活習慣を整えることである。寿命を決める因子の4割から6割は生活習慣であることが分かっている。

古今東西、夥しい研究者が寿命を延ばす筈の様々な食品を試したが、発見されたのは寿命を短くする食品ばかりで、未だに延ばす食品は発見されていない。

そんな中で誰がやっても再現性のある実験が一つだけある。カロリー制限である。食事の量を制限すると寿命が延びるという実験結果は20世紀の半ばに報告されたが、今でもその正当性は揺るぎない。ただし多くの実験はラットやハムスターなどの小さな動物で行われた。体重の少ない動物は脈拍が早く、寿命が短いのである。

寿命の長い動物で寿命の実験をすると長い

有害物質や気候などの環境要因が寿命に占める割合は2割から3割である。

遺伝的要因も2割から3割であると思われる。「長生きしたければ長生きの親から生まれてこい」という諺があるが、当たっている。遺伝子进行操作して寿命を延ばす実験は、現在の科学の最先端である。近い将来には、遺伝子进行操作することにより寿命を延ばすことが可能になるであろう。お金を払えば月に行ける時代である。遺伝子を買って寿命を延ばす世の中が出現するかも知れない。「1年の寿命の延長」はおいくらになるのであろう？しかし今のところ、永遠に生きることを保

年月を要する。人だと80年、サルでも30年は必要である。

ネズミのような小さな実験の結果が人間に当てはまるのか議論は分かれたが、数年前にアメリカの研究者がサルの結果を報告した。



タテヤマギンバエ

人に近似しているサルでも与える食事の量を減らして飼育すると、寿命が延びたのである。

研究者が、まるまる太ったサルと食事制限で痩せたサルをじっと観察して、その論文に書いていた。太ったサルは満ち足りた顔をしており、痩せたサルは苛立っていた。

というのがその日の講義の概略である。

「満足して早く死ぬかイライラして長生きするか、君たちはどっちになりたい？」と学生に聞くと皆が太ったサルの方に手を挙げた。